

向かい合わせから山なりのパスへ —少年院在院者への現象学的アプローチ—

Emergence of “loop-pass to the other” from “face-to-face relation” — Phenomenological approach to a person referred to juvenile training school —

小 澤 豊
Yutaka OZAWA

目 次

- 1 関心の所在
- 2 研究の目的
- 3 研究倫理及び方法
- 4 自己についての語りと「存在」
- 5 「向かい合わせ」による触発
- 6 「山なりのパス」の現出
- 7 総括

1 関心の所在

本論文の目的は、少年院に送致された少年たちがそこでの生活を通して立ち直りや成長の契機を見出す過程を描き出すことにある。

少年院において行われている矯正教育と言われる教育活動には、これから先非行のない安定した社会生活を送ることを目的として、非行に結び付く問題性に焦点を当てた指導（「特定生活指導」という。）のほか、社会人・職業人としての態度や技術を学ぶ指導（「職業指導」という。）、情操や自律性を涵養する指導（「特別活動指導」という。）、基礎体力の向上のための指導（「体育指導」という。）などといった幅広い指導領域がある。

これらの領域はそれぞれが関連付けられつつ、その基盤としてある日常的な指導（「生活指導」という。）に支えられており、職員（その多くが「法務教官」という官職にあり、以下「教官」と総称する。）との面談あるいは普段の何気ない会話の中に、また、自分と同じく在院している他の少年（以下「院生」という。）との集団生活を通じた学び合いの中に、さらには生活空間そのものの中に、人間的な成長や非行からの立ち直りの契機が織り込まれている。そして、在院生活を通じて本人の特性とある出来事とが交差するとき、大きな変容としてそれが発現することがある。

実務家である筆者は、ある日の出来事を境に、それまでとは見違えるような成長を遂げる少年たちの姿に何度も驚かされてきた。

本論文は実務家の立場にある筆者が、実務の中で気に留めた一人の少年の少年院生活を取り上げ、現象学的アプローチによって、少年が成長し、大きな変容を遂げるに至る契機となった事象へと少しでも接近しようとする試みである。

なお、本論文は筆者の私論であり、法務省矯正局の見解によるものではないことをあらかじめお断りしておく。

2 研究の目的

初めに本研究の動機となったあるエピソードを紹介する。

本研究の対象としたK君（仮名）は、少年院に初めて入院した10代後半の男子少年である。

少年院送致の原因となった非行は、その非行名としてだけ見ればしばしば見かけるものであり、また、身体状況や精神状況について特徴的な面が見られないこともあり、筆者にとってのK君は、当初、あまり目立たない印象であった。

しかし、生活に慣れてきた頃から、K君は次第に職員からの指導や注意を軽く受け止め、スポーツ万能だからとの自負が周囲に配慮を欠いた横柄な行動

に結び付くようになった。

そんなある日、10名ほどの他の院生らとともに参加中のバレーボールの体育指導中、K君はサーブを打つ番として相手側コートから自分側のコートに戻ってきたボールを足で止める行為を繰り返し、指導職員から手で扱うよう注意を受けた。

その場しのぎで謝って見せた彼は、その日の夜の日記で「今日は何度か注意されましたが楽しくできたのでよかったです。次からはあまり動かずに手を抜きながらやろうと思いました。また、イライラの受け流し方も分かったのでいい収穫でした。」とその出来事を記した。

そして次の日のバレーボール時、彼は同じ行為を繰り返してしまい職員から注意を受け、それに対し態度を硬化させたため体育指導を続けられないとして一時的に集団から離されることとなった。

その日の夜の日記で彼は、「体育では自分のミスでみんなに迷惑をかけてしまいました。次からは注意された点を直して手加減しながらみんなが楽しめるようなプレーをしようと思います。自分の技術が下手すぎたので、もっとカバーできるようになりたいです。」と記した。そんな彼を気遣い、職員らが入れ替わり立ち替わりでその様子を見に、また、面接を行った。

それから2週間後の大型連休の最終日に当たるある日、他の院生らとともに卓球の体育指導に参加した彼は日記にこう記した。

「体育では卓球を今日はZ先生と試合をしました。けっこうすごいというか、手を抜いてもらっていたのかなというふうに感じて、S先生やT先生の言っていた行動が目の前でやられていたので、ああいうことを先生方は言っていたんだなと思いました。」

翌朝、その日記に目を通した筆者は、当時K君に面接したS教官とT教官に、そして卓球指導をしたZ教官にこの件で何か申し合わせをしていたのかと確認したが、両名とも、事情は知っていたが申し合わせまでは特段していなかったとのことであった。申し合わせがないにもかかわらず、教官らの間に共通した何かが存在し、K君がそれを感じ取り日記に「ああいうこと」と記したことに筆者は不思議さを感じ、また、そこには何か深層があるように感じた。

卓球の出来事から1月ほど経った頃のバスケットボールの体育場面には、院生の中心となって明るく元気よくプレーする最上級生のK君の姿があった。

彼の変容に感動のようなものを覚え、その姿に少年院に入院した少年たちの変容を支える普遍的なものを感じた筆者は、その転機となる出来事とその受け止め方を当の本人から聴くべく本研究を始めたのである。

3 研究倫理及び方法

K君とその保護者に対し、少年院生活において成長のきっかけとなった出来事を聞き取ることを目的として研究の趣旨を伝えて同意を求め、双方から書面により承諾を得た上で、置賜学院を出院する1週間前の時期に少年に対して1時間程度のインタビューを2回行った。

インタビュー内容はすべて録音し後日トランスクリプトにし、現象学的アプローチにより分析した。

トランスクリプトからの引用部分の末尾に〈3〉といったように示した数字は原稿のページ番号を意味し、1回目のインタビューは〈①3〉(「1回目のインタビューの3ページ目」の意。)、2回目のインタビューは〈②10〉(「2回目のインタビューの10ページ目」の意。)のように表記した。

なお、1回目分のトランスクリプトは全15ページ、2回目は24ページであった。

4 自己についての語りと「存在」

始めに、K君の成長や変容の過程に接近する上での前提となる、K君の自己言及をインタビュー内容から見ていくことにする。

まず、入院当初の自分を、K君は「自分が一番下の存在だったんで」〈①2〉と振り返っている。

K君に限らず、「短期課程」(注1)と言われる矯正教育課程を有する少年院に入院する少年は初めて少年院に入院する者ばかりである。

彼らは少年院での生活の仕方を一から学ばねばならず、そのため自分よりも先に入院し相当の期間が経過している他の院生と、何も分からずにいる自分自身を見比べてしまい、入院して間もない自分の方に過度に低い自己評価をつけることはしばしば見ら

れるところであり、K君にこのような傾向があるのはやむを得ない。

また、少年院では、入院当初に在院者を3級として位置付け、本人の改善更生の程度に応じて、順次、2級、1級とする進級制度をとっている。これは「処遇の段階」と呼ばれ、それ自体は上位の級を優遇する制度ではないのだが、K君が自身を「一番下」として表現したのは「3級」としての自分自身を極端な形で示したものだと思えばその思いも分からなくはない。

ただ、K君の振り返りの仕方に特徴的であるのは、そんな自分を「一番下の存在」と振り返り、その延長線上に、数か月前に入院していたA君やB君（いずれも仮名）という二人の上級生を置いていることであり、入院当初の自分をとりわけ低く位置付けることで、二人を目指しながらこれまで生活を送り、出院を間近に控えた今の自分を上昇気流の中に位置付け表現している点である。

では、インタビューの冒頭の部分で、K君が自身の成長を語る上での比較対象として語っているA君とB君について見てみよう。

まず、A君については次のように述べている（以下、筆者の発言部分を「小」、K君の発言部分を「K」と示す。）。

K：自分が一番下の存在だったので、結局何もわからない状況だったので、A君が一人で日直とか洗濯係とかをされていて自分はすごいなと思えて、A君の存在力がすごく大きくて。最上級生ってということで、その存在力は大きいなっていうふうに自分は思っている。（中略）それで、どこか自分はA君に似ている部分を感じたところがあって、目標とする人物、というか、そういうことがすごいと思ってる。

小：そうかあ。その存在は大きかったんだね。今も大きいのか？

K：はい。今も比較しているところがあって。今、1級じゃないですか。もう少しで自分が上がってきた時のA君に近い存在にはなると思うんですけど、自分が目標としてきた人物を超えられるかっていうところで自分は精神的な支えになっている部分がある。（①3）

少年院に送致される原因となった非行は人それぞれであるが、これまでの非行に向き合い、社会への再参入に向けて指導を受けるべき立場にあるという意味では、院生はみなそれぞれに大きな課題を抱えている者ばかりである。

にもかかわらず、インタビューを行った出院間近の時期にあっても、K君は数か月も前に出院したA君を引き合いにして今の自分を評価している。

その一方で、K君は自分に似た人物としてA君のことを語っているが、筆者の問いかけに対しても、具体的にどの部分を似ていると感じたのかについては明言を避けている。ここでは、今の自分を安定させるために将来像として一旦据えることにしたA君と自分を「似ている部分がある」として関連付けようとしたものとして理解してよいと思われる。

なお、K君は、自身の成長のきっかけとなる核心部分について語る時ほど、逆に「～と感じたことがあって」や「そういうこと」といったような曖昧な言い回しをすることが多い。

次に、B君のことを述べている部分を引用する。

K：自分は存在感が一番強いのはB君かなって思いますね。目指す人はA君なんですけど、B君はタフというか。（①4）

K君の語りの中で登場するA君は生活場面でできばきと行動する上級生として、また、B君は主に体育指導での対戦相手として多く語られる。

K君は2回目のインタビューの中でB君の特徴を次のように語る。

小：A君やB君の存在が大きかったという話をしたでしょ。今も大きいのか？

K：はい。

小：この間、「B君が出院した後にスポーツのライバルがまた現れたんです」って言っていたよね。ライバルが現れたらB君との思い出は消えてしまったりしないのか？

K：いやあ。（少考して）ライバルは現れたんだけど、強さではたぶんB君の方がけっこう張り合ったなっていう。

小：その、強さっていうのは何だろうか。

K：なんか、その、無我夢中でできるっていうんですかねえ。

小：今、何のスポーツを思い出していた？
K：バドミントンですかね。
(中略。K君が得意とするバレーボールに話題が移行する。)
K：まあ、やっぱ、B君はバレーをやっているなって思ったんで。
小：あ、そうなんだ。
K：バレーやっている人ってスパイク打つじゃないですか。スマッシュの打ち方とたぶん一緒なんですよ。バドミントンとかと。
小：そうなんだ。君は専門家だからね。
K：はい。だから、スマッシュが強かったんで、それを返した時や、ラリーって言うんですね。それが、なんか接戦が多かったんで。〈②2〉

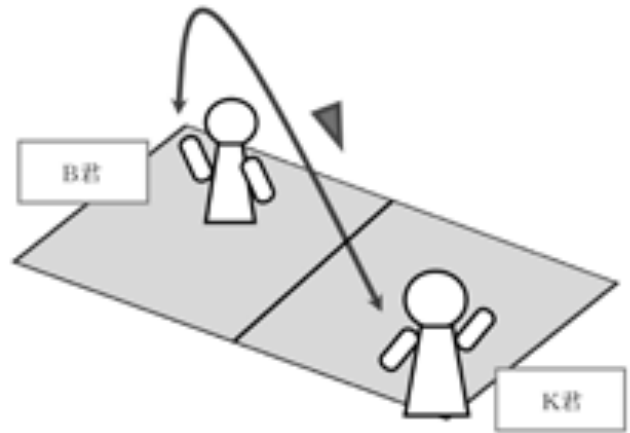


図1

K君にとってB君の存在は、「張り合った」、「接戦」そして「ラリー」で表現される1対1のスポーツでのライバルとして語られている。

A君に対し「自分と似ている」と述べるほどの直截的な言い回しに代えて、K君はB君とバドミントンをした時の手ごたえに、自分が得意としているバレーボールの動きを見て取っていたことを述べている。このことから見てもK君はB君を実力伯仲のライバルとして見ていたことが窺われる。

また、バドミントンに話題が及ぶ他の箇所では、K君は「自分はB君とやる時だけパワーをフルに出していたんです。」〈②3〉、「唯一本気を出せる相手でした」〈②16〉とB君を特別視したり、「自分とB君の場合だったら、ずっとこういう状態だったんです。」〈②3〉と述べ、ラケットを持った格好をしてスマッシュを打ち込む様子を筆者に得意げに見せるなど、B君に追いつき追い抜こうとする中で自分がここまで成長してきたことを筆者に誇示することがあった。

バドミントン場面でのK君とB君の関係性を図解したものが図1である。

ここまでK君の自己理解を考察してきたが、ここで特筆すべきであるのは、K君が自分自身を「一番下の存在」、A君を「存在力がある」、そしてB君を「存在感がある」といったように、本人の普段使う語彙と比較して抽象的な概念である『存在』を用いながら巧みな言い回しで三者の関係を述べていることである。

ここで哲学的な教養を特に持ち合わせている訳でもないK君が用いた『存在』という言葉に、「Sein」や「être」といった概念が意味するような哲学的意義をあてがうことには慎重であらねばならないが、現象学の門徒の一人である筆者は、インタビューの冒頭箇所でもK君の用いる「存在」の言い回しが気にかかり、次のとおり質問している。

小：ところで君は「存在」っていう言葉をよく使うんだね。
K：けっこうよく使ってしまうんですね。
小：難しい言葉だよな。「存在」って。
K：そうですね。(少考して) やっぱ自分は上級生から教えられたことがけっこうあるんですけど、その中でも一人ひとりの個性っていうんですか、長所を、まあ自分は身につけるっていうか。
小：ふうん。「存在」っていうと、何か色がついていないみたいな。
K：はい(大きく頷く。)
小：それが、君が言うと「長所」とか「良い所」みたいな感じなのかなあ。
K：(言いよどみながら) まあ。そうですね(以下沈黙)。〈①3〉

A君を目指しながら生活していた当時の自分についてひとしきり話していたK君は、筆者から唐突に「存在」をいう言葉を用いた点を取り上げられ、要領よく応じようとしているが、これまで好んで使ってきた「存在」という言葉と、インタビュアーに問われて改めて自分がそこに意味づけてきた「長所」や「良い所」とがどうもしっくりこないことに気付かされ、最終的には収拾がつかずに困ったようにして黙り込んでしまった。

「存在」という言葉の語り手でありながらも、概念としての「存在」が指し示す生身の実体とは別のありようを前に、この時点のK君は大いに戸惑っている様子が窺われる。

現象学的アプローチを手法とする本研究において、この「存在」という表現を巡るK君の語りの変遷は注視すべきポイントとなっており、本論文の後半に登場する、K君が「山なりのパス」をする相手となる院生のP君（仮名）から受けた影響についてK君が語る際に用いた表現は、「存在」とは少し形を変えられている。

ここでは、成長過程にあるK君が少年院での生活が始まった頃を振り返るに当たり、当時の自分を「一番下の存在」としたことで、次いで、自身が影響を受けた人物であるA君を「存在力」、B君を「存在感」とそれぞれ表現し、自分自身を定義づける際にも用いた「存在」という概念に関連付けながら彼らを表現していることを改めて指摘するに留め、次章では、K君が大きく影響を受けたと述べるZ先生との卓球場面を取り扱うことにする。

5 「向かい合わせ」による触発

A君やB君を目標にして生活を送ってきたK君も、二人が順に出院し、彼らとはお別れとなった。

前述したバレーボールでの一件があったのは、彼が最上級生となり出院が2か月ほど先に見えてきたある日のことである。

この時のことについてのK君の語りは次のとおりである。

小：まあ、バレーボールの時にあまりよくないことがあって、よくなかったことは自分でもわかるよね。

K：（気恥ずかしそうな様子で）はい。

小：その後、いろいろあって、S先生（仮名）とT先生（仮名）が関わってくれて。あの時とその後で変わったような気がして。先生方はどんなお話をしてくれたんだろうか。

K：自分は励まされていたと思うんですけど。

小：別にいいんだよ、気を遣わなくて。

K：いや、大丈夫です。

小：でも、そう。

K：あ、はい。

小：じゃあ、S先生はなんて言ってくれたの。

K：その、なんていうんですかね。話があるなら言いなさい、みたいな感じだったんですけど。今ちょっと話できるか、みたいな感じで、自分はちょっと話す気はなかったんですけど無言だったんですけど。その日はS先生帰ってしまって、次の日来て、まあ、治ったか、みたいな感じで。「あ、はい。」って』みたいな感じで。（中略）自分が実力あるっていうのは先生たちも明らかに知っているということで、まあ、それでこう、やっぱ、力を抜きなさいというか、合わせてやりなさいというんですかね。

小：実際にはそういう言われ方をしたわけじゃないでしょ。

K：まあ、謙虚になりなさいっていう。〈①7〉

インタビュー時から数えて2か月ほど前の体育場面で見せてしまった自身の態度を、改めてよくなかったと認めることができるようになったK君に、私たちは人間的な成長を感じ取ることができる。

そして、一時的に集団から離れた生活をしていたK君を気かけ、その様子を窺いに来たS教官やT教官の姿やその声かけにK君は「励まされていたと思う。」と感謝の思いを抱いていた。

ここでの発言にも前述した語りと同様「…みたいな感じ」や「…っていう…」という遠回しの語りが反復しており、この部分に核心的な内容が含まれていることを示唆しているが、ここにはS教官の関与を前向きに受け止め、受け入れていこうとするK君なりの受容の過程を見て取ることができる。

では、これほどの変容のきっかけとなったZ教官

との卓球では、具体的にどのようなことがあったのだろうか。

小：その頃の日記を見てたら、「これからは手を抜きます。」とか、「イライラの受け流し方も分かったのでいい収穫でした。」というようなのがあったので、ああ、残念だなあって思っていたんだ。S先生の、その「謙虚になりなさい」って話で、まあ、それとは意味合いが違うよね。

K：はい。

小：でも、しっくり来たのがZ先生と卓球をやった時だったという…。Z先生に何を感じたの？

K：まあ、その、なんて言うんですかね。(少考した後) Z先生を見ていて思ったことが、利き手じゃない方の手。

小：え？

K：Z先生、たぶん左利きなんです。自分は、まあ、Z先生に「手加減しないでほしいです。」って言って左でやってもらったんですが、自分以外の人には右手でやっていたんで。

小：Z先生が？へえ、そうなんだ。左利きなんだ。それが右手で。

K：まあ、力を抜くっていうか。

小：へえ、君には左手でやってくれたんだ。

K：左です。はい。

小：じゃあ、逆に力を抜くっていうよりは力を出してもらった…。

K：はい。

小：君からお願いしたの？

K：はい。「ちょっと本気出してくださいよ。」ってみたいな感じに言って。〈①9〉

Z教官は20歳代の教官であり、実は卓球の名選手である。

これまでの生活の中で、Z教官が卓球の名手であることを見聞きしていたK君は、その日の体育指導の種目が卓球で指導者がZ教官であると予想し、数日前からその対戦を心待ちにしていたという。なお、卓球の指導があったその日は、先のバレーボールの一件から数えて2週間後に当たる。

バレーボールでの一件があった日、得意としていたバレーボールの時間にその取組態度に注意を受け

たK君が、当時、結論として出した答えは「これからは手を抜いてやろう」という短絡的なものであった。

しかし、そのわずか2週間後には、一転して卓球相手をしてくれたZ教官に対して、自分は本気でやりたいから先生も本気を出してほしい、と求めている。

その彼の姿勢にはチャレンジ精神が前面に出ており、浮ついた気持ちでプレーしようとの思惑や職員への不信感といったものは微塵も感じられない。

一見すると、まったく逆にも見える意志の向きについて、当の本人であるK君はこれまで標榜してきた「(自分が)手を抜く」から「(Z教官が)力を抜く」というように、巧みな言い回しで自身の行為の意味を矛盾させることなく調和させようとしている。この矛盾点に気付かせようとして、「力を抜くというよりも力を出してもらったのではないかと」筆者が指摘したのに対して、K君は「はい。」と淡々と応じて何事もなかったかのように振る舞っていた。

これほどまでに都合のよいように論理を展開させながらZ教官との卓球を振り返るK君の背景にあったのは、自身の目標とする人物を、B君からZ教官に移行した時期としてこの出来事を位置付けようとするねらいがあったものと考えられる。

前章で述べたとおり、K君にとってB君は、バドミントンを通じて張り合い、ラリーが続くような相手として「存在感のある」院生であった。K君はB君との打ち合いの中でその存在感を目の当たりにし、接戦を通じて「一番下の存在」である自分自身の少し先に「存在感」としてのB君を置いていた訳である。

そして、K君によるB君への関連付けの仕方は、一見したところ、卓球場面におけるZ教官との関連付けにも似ている。インタビューは次に進む。

K：「ちょっと本気出してくださいよ。」ってみたいな感じに言って。

小：うんうん。

K：んで、自分はなんか本気出されないと正直いらいらしちゃう。だから「本気出してやってください」って言ったんです。

小：そしたら「いいよ」って？

K：はい。
小：パコーンって来たんじゃない？
K：(笑顔で) あはは、はい。
小：返せた？
K：いや、1回は返せたんですよ。
小：じゃあ、大負けだね。
K：自分としては気持ちのいい負け方っていうか。Z先生のいい所っていうか、謙虚な部分が自分は見えたと。
小：うーん。でもさ、力を出されたんだよ。
K：でも、技とかをちょっと見抜けた部分もあるんで。〈①10〉

けた違いの実力を持つZ教官に物怖じせず対し、さらには、その当時、S先生やT先生から「謙虚になりなさい」といった趣旨での指導を受けていた、その指導の先にある具体像を目前のZ教官の姿に見出そうとするK君の、成長へのたくましが読み取れる箇所である。

前述したように、【S先生やT先生の言っていた行動が目の前で行われていたので、『ああいうこと』を先生方は言っていたんだな、と思いました】と、K君は当時の日記において、本人なりの納得に帰着することができている訳である。

K：Z先生がきっかけとなって、力を抜くのはこういうことなんだって自分でも理解して、その後でL先生とかM先生とかも剣道が強いとか聞いていたし、N先生はバスケがうまいって聞いていたんですけど、それなのに、こう、態度が、得意なスポーツに対してすごい改まっているっていうんですかね、『いやあ、僕は全然うまくないから。』って感じに。
小：なるほどね、本当は上手なのに。
K：はい。そういうのを見て「これが謙虚かあ。」って感じですね。(中略)
小：何か色合いが変わった、そんな感じだね。
K：(大きく頷き) はい。〈①15〉

K君の納得の仕方は、Z教官だけでなく他の教官へ向ける眼差しにも影響している。彼によれば、少年院の先生たちは皆、Z教官と同じように何がしかの武道やスポーツに秀でており、それにもかかわらず普段はそのことに触れることなく仕事をしている

のだということである。

その真偽のほどは別としても、Z教官との卓球の前後とでK君の世界の見え方はすっかり変容してしまっていることが分かる。

インタビュアーである筆者は本人の語りに応じながら、その場のやりとりを総括するため「色合いが変わったんだね。」としてまとめ、K君がこれに共感するように大きく頷き初回のインタビューは終了する。

Z教官と卓球をしたことは、K君にとって以降の生活の羅針盤となるほどの出来事であったようである。初回のインタビュー後半において、Z教官との思い出に話題が移行してからは、A君やB君に関する話題はすっかり消えてしまったほどである。

これほどの影響があった背景には、K君がZ教官に普段から好感を抱いていたことや、卓球という種目そのものを得意としていたことが前提としてあるのだろう。しかし、それだけではない。

ここで手がかりとしたいのは、卓球台に対峙したZ教官の姿をK君が具体的に語る次の箇所である。

K：自分的には、いい収穫だなんて思いました。
小：テクニックが身に付いて、こう、回転が「ビュー」って行ったとか？
K：そうですね。Z先生のフォームを真似したらできましたね。フォームっていうか同じ立ち位置と打ち方を真似したらできましたね。
小：プレーしているときに学んでいるの？
K：そうですね。微調整しながらプレーしてますね。いつもなにかしら。
小：終わった時にZ先生から教えてもらったのではなくてかい？
K：(自信あり気な様子で) やっとしてみせてはい。
小：やっている最中に分かるのかあ、へえ。
K：そうですね。肩の動きとか細かい動きを見て学んでますね。
小：あれれ。でも対面競技だから、右と左が逆じゃない？
K：そうですね。でも逆なだけじゃないですか。手の角度とか、肩の動きを見てればだいたい分かりますね。〈②6〉

B君との関係がそうであったように、Z教官との関係でもK君は、相手との関係性を楽観的にとらえている。ここで見られるように、一方では明らかな実力差があることを十分認識しながら、他方では相手の技量には努力次第ですぐに到達できるかのような口ぶりである。

振り返りの中で、K君はZ教官に敬意を示しつつも、自分はすでにZ教官のような回転を打つことができていると述べ、また、この技術はZ教官の(1)立ち位置(2)打ち方(3)手の角度(4)肩の動きを真似し、プレーをしている最中にすでに学んでしまっていたとまで言い切っている。

具体的な場面を想像しながらインタビューを進めていた筆者は、Z教官が左利きであるという情報や、ネット越しの対面形式をとる卓球の状況をうまく思い描くことができずに「右と左が逆じゃない?」と質問しているが、K君は「そうですね。でも逆だけじゃないですか」と淡々と応じている。K君とZ教官の関係性を図解したものが図2である。

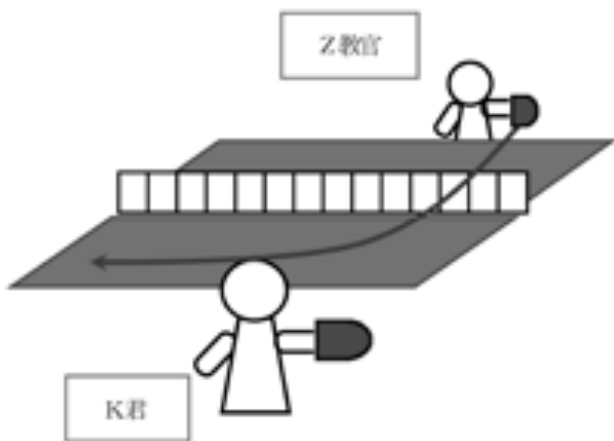


図2

「対面競技」での「利き手違い」の関係性の図式は、実体と鏡像の示す図式と同一の図式を描く。

図を参照すると、対面競技で左右が反転するのだから習得しづらいだろうという趣旨での筆者の問いかけが適切でないことは一目瞭然である。この【対面競技での利き手違いの関係性】は、おのずと鏡像関係に位置し、むしろ、K君の語る「立ち位置」や「打ち方」、「手の角度」そして「肩の動き」を通じて習得するにはもってこいなのである。

Z教官は、K君によるその場での求めに応じる形

で自身の持ち手を右手から左手に変えたのであって、当初から深遠な意図をもって卓球に臨んだわけではない。このことについて筆者は事後、Z教官本人に確認をしているが、Z教官自身が「そのようなことがあったような気がする。」といった程度の記憶であったことから明らかである。

しかしながら、求めに応じてラケットを持ち替えた出来事こそが、K君の変容の転機となっていることは明白である。

バドミントンを通じてのB君との関係性と、卓球を通じてのZ教官との関係性は、K君が自分自身の成長の少し先に見据えてきた対戦相手であったという点では類似している。Z教官と卓球する体験を通じて、K君は成長の目標をB君からZ教官へと切り替えた、という見方もできるだろう。だが、その切り替わりに伴い、K君が対戦相手に抱く緊張感は大きく低減している。

K君とB君の関係性は、常時接戦の、いわば、手を抜こうにも抜きようのない関係性である。それは確かに成長したかもしれないが、しかし、ともにつま先立ちをし続けるような厳しい関係性である。一方、K君のZ教官との関係は、「Z先生は、自分がスマッシュを打つタイミングをわざと作ってくれていたんです(①14)」といったように、圧倒的な技量の違いを背景として、B君との関係のように、勝敗のため競い合う構図ではなく、相手から学び取ろうとする構図に組み替えられている。

次にこの点を運動の観点から見ていくと、向かってくる球についてK君は、「Z先生は左利きで自分は右利きなんで、普通、自分の利き手の方に球が来ると思うんですけど、ネットを超えた時点で球が自分から見て左に曲がって、前でキューンって回っていくんです(①11)」と述べており、バドミントンのプレー中、B君がラケットを振り下ろしてシャトルを打ち返す【上下運動】であるのに対し、一転して、相手の力量を見ながら左右に自在に軌道を描く【横運動】への質的な転換とも見て取れる。

偶然ながらも、利き手が違う二人は卓球台を介して互いを鏡像関係で対峙させ、これまでの関係性を基礎としながら、より濃密な「教える-学ぶ」関係性を構築していたと捉えることができる。B君の世界の見え方が一変した背景を、B君自身が開示した語りからこのように解釈するに至った。

K君の変容は、少年院入院時に当面の自身の将来像を据えるために関連付けていたA君やB君との関係性の枠組からの離脱であり、次章で示す他の院生P君との関係性の構築の基礎となっていく。

6 「山なりのパス」の現出

Z教官との間に生じた鏡像的な関係性のもとで、K君の発言は大きく変化する。言うなれば、その変化は「打ち合う関係性」から「パスする関係性」への移行である。

小：もし、Z先生がいたらもう一回対戦してみたい？

K：もう、やりたい気持ちしかないですね。

小：そうかあ。じゃあね、Z先生は君と対戦したいと思っているかなあ。

K：いや、Z先生は、たぶん、やっぱ、本気でやったら自分なんか相手にならないと思うんで、本気でやるんだとしたら、やりたいとは言わないと思いますね。自分（※K君自身を指す。）のレベルが低いっていうか。

小：うーん。それは、君自身がもしZ先生の立場だったらそう感じるってことを言っている訳で。

K：はい。

小：君は、自分よりも能力的に低めの人とプレーする時に嫌になることがあるってことなのかな？

K：（少考して）そうですかね。でもやっぱ力量を合わせているんで。

小：力量を。

K：はい。スマッシュは全然打たないんで。（中略）合わせることで自分も楽しくなるんですよ。ラリーが続いた方が面白いじゃないですか。〈②7〉

スポーツに話題が及ぶと何かにつけ得意げな発言をしてみせるK君が、卓球に関してはZ教官よりも自分が上手でないことを認め、また、再戦したい思いはあるが、勝敗のための試合であればZ教官は自分との対戦をしながらないだろうと推察している箇所である。

これを聞いた筆者は、仮にK君がZ教官の立場で

あったならK君の立場にある子を相手にならないとして対戦したがるということかと質問しているが、これに対しK君は、インタビュー全体で唯一この箇所だけで、筆者に「そうですかね。」と反論している。

その後の「力量を合わせているんで。」、「スマッシュは全然打たないんで。」は他の箇所と比べてぶっきらぼうな語り方をしているが、Z教官が自分との真剣勝負を望まないだろうというK君の発言は、Z教官への一種の敬意を示したものである。普段から自分よりも弱い者（上手でない院生）とプレーするのを嫌がっているという意味ではなく、むしろできるだけ配慮ながらこれまでプレーしてきたつもりであるとする自己主張がにじみ出ている。

筆者からの問いかけに応じる形で、K君は相手に力量を合わせる（注2）ことによって勝ち負けとは別に現出する事柄があることに触れ、これを「続くことの面白さ」〈②7〉と語り、以降、話題の焦点は「続くこと」に当てられていく。

その後、K君が小学校当時に所属していたサッカー部へと話題が及び、チームプレーの大切さについてK君が熱っぽく語る場面が続くが、再び、現在の少年院生活でともに生活している他の院生との関わりに話題が戻る。

小：みんなに合わせながらやっていることとかはありますか？

K：今はバスケットボールとかはそうですね。

小：上手でない人にはこれくらいの力で投げたとか、読み替えているところがあるんじゃないかと思って。

K：自分、けっこうありますね。

小：最近は何にかありますか？

K：自分、P君にはゆっくりとパスを出すように心がけていますね。

小：バウンドさせたりとかかい？

K：ちょっと山なりにボールを投げてあげたりとか。〈②10〉

P君は、K君が1級に進級した頃に入院した少年で、K君から見れば時期としてはだいぶ離れた下級生である。彼はK君より年少であって、さらにその容姿や雰囲気から運動が不得意そうであることが容

易に想像される、そんな少年であった。

少年院に入院する対象はおおむね12歳以上23歳未満の者であるが、小中学校や高等学校とは異なり、下級生が自分より年上ということもありうる。少年院生活では他の院生に年齢が公表されることはまずないが、P君の様子を見たK君は、P君が自分よりも年下であること、また、運動能力についても配慮が必要であることを察知していたようである。

さて、先に大きく取り上げた「存在」という言葉と同様に、K君が普段使う語彙にしては抽象的な部類に入る『山なり』という言葉を用いたことが気にかかった筆者は、K君の発言に続けて、その真意を確かめようとしている。

小：山なりかあ。それって具体的にはどんな感じなのかな。

K：たぶんですけど、他の人たちはライナーなんですよ。ちょっと速いくらいかな、なんですけど、自分が出すときは、こう、ワテンポ遅れて出すっていうんですかね。

小：「今、行くよ。」みたいな。

K：はい、「ちょっと出すよ。」って合図を出してから。

小：その「ちょっと出すよ。」ってどんな感じ？

K：こう、まあ、走り出しながら「今から行くよ。」みたいな。

小：ほう、「今から行くよ」みたいな、かあ。

K：そうすると、あとは指の力だけでパスを出せるんで。〈②10〉

相手に力量を合わせることに意義を見出し、相手とのプレーが続く楽しさを体験することができた後のK君の語りには、バレーボールを足で扱い注意を受けた後「これからは手加減して相手にする」と述べていた2か月前までの彼は微塵も窺われない。

「相手に手加減すること」から「相手に力量を合わせること」への質的な移行が読み取れる箇所である。

運動が苦手なP君へのパスについて、当のK君は、物理的な軌道を指す「山なりのパス」と表現しているが、先に語られた(1)「ゆっくりとパスを出すように心がけている」ほか、ここには、(2)「ワテンポ遅れて出す」(3)「『ちょっと出すよ』って合図を出してから出す」や「『今から行くよ。』みた

いな」といった、送り出す側から受け取る側へのタイミングや思いという意味合いが重層的に込められていることが分かる。

さて、スポーツの得意不得意は、一般社会の10代後半の男子でもそうであるように、少年院生活を送る彼らの間では価値が置かれるところである。K君にとってもそうであったことは前述したバドミントンでのB君との接戦を得意げに語る様子からも窺い知れるところであるが、その一方でK君は、誰彼問わず思いきりプレーする他の院生の様子をむしろ批判的にとらえ、相手側に思いを寄せたパス回しが大事であることを以下のように語っている。

K：けっこう周りの院生が「強いな」って思う時があるんですよ。

小：「強いな」って？

K：P君へのパスが。

小：ああ。パスがね。(中略)

K：明らかに強いんでって思う。

小：ふうん。でも、それを間違えているとか、批判することではないと。

K：まあ。

小：でも、正直いらいらする訳だ。

K：まあ、正直しますね。見てて「分かるんじゃないかなあ」みたいな。

小：言葉にするとどんな感じ？

K：「パス合わせてあげればいいのにな」っていう。〈②13〉

K君はここで、バスケットボールの場面で他の院生がP君に送るパスが明らかに強いのだと彼らを批判しているが、その批判はルール上違反であるかどうかを論拠としたものではなく、そのパスをP君がどう感じたのかが問題であるとする、P君側に軸足を置いた上での批判である。

P君から見た場合にはよくない、とする批判の仕方は次の箇所にもはっきりと見られる。

K：なんか、みんな適当なんですよ。見てて。
小：適当。

K：はい。なんか相手の方見てパスを出していないっていうか。

小：相手の方かあ。その「相手の方」って方角のこと？

K：方角っていうか、パス出すときってバスケだったら、正面を向いてっていうか、だいたい相手の方を向かなきゃパスはできないんですけど。それで、こう、みんなは相手の方を見ないで雑にパスしたりとか。

小：「相手の方を見る」というのは、相手の方角を見ているのとは別に何を見ているんだろうか。

K：たぶん走る先の位置じゃないですかね。(中略) ちゃんと取れる位置。ちゃんとパスに思いがこもってますよね。(中略) ちょっとふわっと来て普通にパシッって取ってそれを返すみたいな (②15)

「相手の方」とは具体的に何を意味するのか、との筆者の問いかけに、K君は「相手の方を向かなければパスはできない」という常識的な見地から出発して、結果、P君が今いる位置というよりも「(P君がこれから)走る先の位置」であり、また、「ちゃんと取れる位置」のことだとしている。

彼の語る【現在地というよりは少し先の位置】を、前述した「山なりのパス」の第4の要素としよう。この考え方の基礎には、接戦で考える暇すら与えられなかったB君との関係や、鏡像関係を通じて与えられたZ教官との関係があり、【現在地ではなく少し先の位置】とは、これらを経由して到達した彼なりの結論であり、そこへと接近する方法が「山なりのパス」と表現されたものであった。

K君とP君の関係性を図解したものが図3である。



図3

「山なりのパス」

- (1) ゆっくりと出す (2) ワンテンポ遅れている
(3) 『今から行くよ』の合図 (4) 現在地より少し先

では、K君がこれほどまでにP君に魅かれた理由は何だったのだろうか。

理由と考えられることとしては、K君による生い立ちによるところが多く、その一部を示すところとしては小学校当時の振り返りが参考となるが(注3)、P君の存在について語る次の箇所は重要である。

K：P君のときは丁寧にやって徐々にハードルを上げて行って、P君にもできるプレーを再現できればうまくいったとかわかると思うんで。それで強いパスを受け止めることができれば、それはそれで嬉しいんで。

小：P君が少しできるようになったら、強めのボールを投げてあげられそう？

K：そうですね。

小：それはZ先生がしてくれたような感じかい？

K：そうですね。自分、P君のときだけなんですよ。そういうことしているのは。

小：P君の存在っていうのは、ちょっと今までの人たちのとは違って、君の何かを引き出してくれているようだね。

K：そうなんですよね。また別だと思いますね。

小：こういうのは「存在」という言葉でオーケーかな？

K：(少考して) P君はいることでやっぱ存在するっていうか。一緒にいるじゃないですか。一緒にいることで、それなりに自分も、まあ、いろいろあるわけで。やっぱP君がいなかったらこういうことはここでは思わないって。

小：巡り合わせは不思議だね。

K：A君やB君は、やっぱ見ての影響なんで(中略)力を抜かなきゃいけない相手っていうんですか、それとは別で、唯一本気を出せる相手っていう区別は、区別は大事なあって。(②24)

冒頭で示したとおり、集団生活を基本とする少年院での生活では、教官からの影響もさることながら院生同士がそれぞれの存在から影響を受け合う。中でもP君からの影響の原因をK君は「一緒にいること」と述べ、A君やB君のような上級生からの影響について述べた「見ての影響」とは別であるとして

いる。

右も左も分からない入院当初の時期に上級生の動きを見ることによって受けた影響(見ての影響)と、出院間近の時期に差し掛かり相手の弱さに自分自身の弱さを重ね合わせつつ相手に配慮したプレーをするに至った影響(ここでは「見ての影響」に対比させ「居ての影響」と呼ぶことにする。)とは質的に異なる影響の受け方であり、K君はこの2つを区別しなければならないものとして整理していることがインタビューを通じて見えてきた。

「見ての影響」から「居ての影響」への移行という観点に立ち、改めてZ教官と関わりの意味を考察すると、K君が日記に書いた「ああいうことを先生方は言っていたんだな」の『ああいうこと』の気づきは、実に大きな転換点であったことに気付かされる。

図4のとおり、B君とのライバル関係、そして、集団生活を離れた時期に受けたS教官やT教官による声かけとその後のZ教官との卓球を通じて、K君は、挫折後の励ましや、他者に向けた配慮への促し、そして、あるべき姿の提示といった重層的な意味をそこに見出しており、Z教官という存在との鏡像的な対峙を経て、K君はP君との山なりのパスの関係性に到達しているのである。

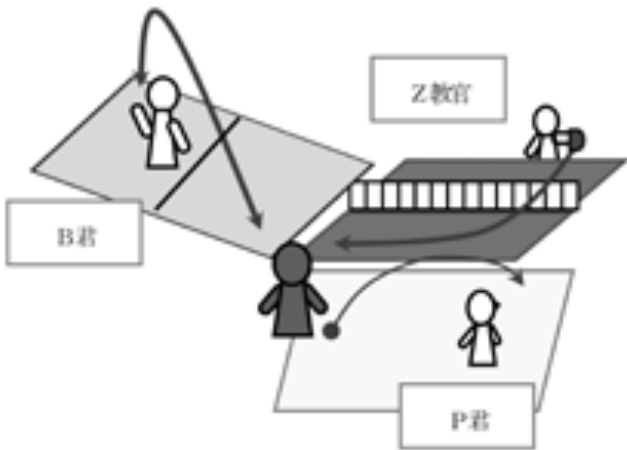


図4

7 総括

おおむね5か月の在院期間のエピソードを振り返るK君の傍らでその語りに応じながら、語りの中のK君が当初はB君、次いでZ教官、そしてP君と、誰かとの間の濃密な関係の中を移行しながら変容し成長していく過程を筆者は肌身で感じ取ることができた。

「非行からの立ち直り」という個々に求められる課題とともに人間的な成長や変容もまた期待される少年院生活の中で、K君は身近な上級生を皮切りにして成長のモデルを模索し、バレーボールでの対人不調の出来事を自分を見つめ直す機会とし、卓球の場で理想的な成長モデルに相対する機会を得て、最後には他の院生への配慮ある関わりを体現するに至っている。

本研究ではこの過程を体育種目やその種目に象徴される動きなどに着目してきたが、これらをまとめると、一連の過程は図5のとおりであり、実に多形的な様相を呈していることが分かる。



図5

最後に、本論文の研究動機となった「ああいうことだったのか」とK君に気づかせたZ教官との鏡像関係に立ち戻りもう少し考察を深めたい。

本気を出してほしいとの求めに応じてZ教官が卓球のラケットを利き手に持ち替えてくれたこと、また、それによってZ教官の卓球の技術を真似するこ

とができたとの経験は、K君をB君との関係からP君への関係へと橋渡しをしてくれた訳だが、筆者にはこの鏡像関係に「学ぶ-教える」の本質があるように思われる。

「鏡像と実体とはなぜ左右が逆になって見えるのか」という鏡像反転問題と言われるテーマには、物理学や心理学の分野において議論され諸説が存在するが（注4）、K君の事例をもとにして改めて教育現場の見地から考察すると、鏡像関係に立った二人には、他の関係には見出すことのできない存在の深みが交錯していたようにとらえることができるのではないかと考える。

「この（教育学の）歴史は、大人と子どものあいだに生ずる鏡の現象（ce phénomène de miroirs qui intervient entre adulte et enfant）を理解させてくれます。事実、大人と子どもは、向かい合わせて立てられた二枚の鏡のように（comme deux miroirs posés l'un en face de l'autre）お互いを無限に映し合うのです。子どもとは、われわれ大人がこうだと信じている当のもの、子どもはこうであってほしいと望んでいるわれわれの子ども像の反映にほかなりません。」（注5）

メルロ＝ポンティは、いわゆる『ソルボンヌ講義録』の初講に当たる『大人から見られた子ども』の中で、教育関係を鏡像図式に基礎づけよう説明した。

大人が子どもに意図的に働きかける見地に立つ教育学から、子どもが大人を見て真似することを起点とした教育学への視点の転向を意味するこの部分は、「大人と向き合った脱自的な存在としての子ども」を提起するものと解釈されるが（注6）、K君のZ教官とのネット越しの立ち位置、そして、利き手違いの向かい合わせの関係が、無限の映し合いとして本人の大きな変容を引き出したものとして解釈できるのではないかと考える。

また、晩年の著作『眼と精神』においてもメルロ＝ポンティは、「私が〈見つつ-見られるもの〉であるが故に、つまりは〈感覚的なものの再帰性〉であるが故に、鏡が現れるのであり、鏡はその再帰性を翻訳し、倍加する…鏡の中の幻影は私の肉体を私の外へ引き出すのだが、それと同時に、私の肉体というまったく〈見えないもの〉（l'invisible）が、私が見ているもう一つの身体を身にまとうのだ。以後私の身体は、私の実体がそこに移りでもしたかのよ

うに（comme ma substance passe en eux）、他人の身体から出てくる線をさえ身につけるようになる。人間は人間にとっての鏡なのである（l'homme est miroir pour l'homme）。」（注7）と、鏡像を介して本来見えないはずの自身の身体が感じられるとしている。

とすれば、本研究で取り上げた出来事を契機として、K君は鏡像関係にあるZ教官を介して、Z教官を我が身に移行させるようにして自己の変容と確立に至っていると解釈できる訳である。

K君の特性とある出来事との交差を通じて、K君はすでにそこにいたP君の存在を自身の変容の契機となる『居ての影響』として感受するまでに成長を遂げた。筆者はその姿に更生に向けて日々の少年院生活を送る院生の本質を示す変容を感じ取ったのであった。

注

1 ここで示した「短期課程」とは、少年院の教育課程として位置付けられている「短期義務教育課程（SE）」と「短期社会適応課程（SA）」の総称である。

前者は義務教育を終了していない者、後者は義務教育を終了した者を基本的な類型とし、いずれも非行からの早期改善の可能性が大きい者を対象としている。標準的な教育期間は6月以内であり、他の教育課程が2年以内の教育期間としているのに対し、その名称のとおり短期間であることを特徴としている。

2 ここでK君は「力を合わせる」という表現に代えて「力量を合わせる」という表現を用いているが、「力を合わせる」とする場合、相手の力に合わせて自分の力を強弱することよりも、個々の発揮する力を一箇所に結集することを意味することから、K君が意識的に区別していたのかは不明ではあるが、前者に意味を限定させるような言い回しである「力量を合わせる」を彼が選んでいる点は興味深い。

3 A君やB君との関係性を「存在」という概念のもとで関連付けていたのと同じような仕方で、K君は各箇所でP君と自身との共通点を「弱さ」として述べている。

「自分は小学校2、3年生頃、弱い立場にいた

んでもともとは弱いつていうか。それからですね、自分が弱い人に味方するようになったのは。〈②21〉、「同級生とか運動が不得意な人と一緒に練習して、その成長過程っていうのも分かるし、自分の弱いところっていうのも、そっちもそれなりに分かってくるんで〈②18〉」、「弱い人でも、何かしらどこかで強い部分を持っているんですよ。その何かしらいい所を自分に取り込めたらいいと〈②19〉」

木田元訳) みすず書房1966.

以上のように、K君がP君に感じた(あるいはP君がK君に感じさせた)「弱さ」とは、K君にとって、幼少期の自分を思い起こさせる部分であったり、それを通じて今の自分の「弱さ」が気付かされる部分であり、さらにはこれからの自分を取り込むべき、その人の裏にある「強み」を際立たせるような部分であるとして、重層的に意味づけられていることが見て取れる。

4 高野はその著書『鏡映反転』の中で、この議論の歴史について触れ、物理学の分野でのファインマンらによる移動方法説、心理学の分野でのナヴォンによる対面遭遇スキーマ説やグレゴリーによる物理的回転説を取り上げ、これらを批判しながら、新たに「多重プロセス理論」を提唱している。本論文は鏡像関係にある教育関係の深層を探るものであって鏡像と実体の見え方の議論には深く立ち入らないが、実体と鏡像の関係性は古くから問いを巻き起こすテーマであって、問いそのものに深みがあることが分かる。(高野2015, p.18-83)

5 Merleau-Ponty, Maurice. SR. p.91. 木田訳132-133頁

6 西岡2008, p.349

7 Merleau-Ponty, Maurice. OE. p.23. 滝浦訳267頁

文献一覧

高野陽太郎2015『鏡映反転』岩波書店

西岡けいこ2008「脱自あるいは教育のオプティミズム」『現代思想』第36巻第16号、青土社

Merleau-Ponty, Maurice. *à la Sorbonne-résumé de cours 1949-1952*, Cynara, 1988. (引用部分では(SR)と表記した。)『意識と言語の獲得 ソルボンヌ講義録 I』(木田元、鯨岡峻訳)みすず書房1993.

Merleau-Ponty, Maurice. *l'oeil et l'esprit*, Gallimrd, 1964. (引用部分では(OE)と表記した。)『眼と精神』(滝浦静雄、